

# セント・メアリー号の失われた航海

大村伸一

1

って思ってるけど。

出発して今日で五日目。ずいぶん沖に来たから今日のはじめて少し海に撒いてみたよ。でも、風がすぐが変わって失敗しちゃった。紙がデッキにもどってきたの。あわてて拾い集めたけど、ぜんぶ拾えたか分からない。ちゃんと海に飛んだのもあるしね。明日からは船の後ろの方で撒くことにする。

2

これで五つ目の寄港地だよ。

なんていうのかな、船が人間だとすると、港に寄るたびに船の体に新しい血が輸血される。そんな感じ。港に入るたび、すこしづつ違った思考やまるで相入れない外見のものやひとが乗り込んでくる。

そのたびに最初は混乱が起こるわ。でも船の上ではどこにもゆくところはなく、やがてみんな自分が船を支配することを諦めて共存することを選ぶの。

今日は千枚撒きました。少し離れたところで、私を監視してる人がいる。海に紙を撒いちゃいけないのかな。見つからないようにやるね。

3

今度乗ってきたのはすごいおじいちゃん。わたしのおじいちゃん(好きだよ)より年寄りだね。車椅子で乗ってきて、昼間は外で日向ぼっこしてる。お金持ちなのかな、お世話係が大勢いて、食事も専用のコックさん。身の回りは若い女の人が三人。ボディガードがいて近くに行けないんだけど、女の人たちはみんな裸みたい。どうなってるんだろう。興味津々。

今日で三分の一くらい撒き終わったよ。今日は変なおじさんが近寄ってきてこれは何の数字だってうるさく聞かれた。何も知らないって答えたけど、また来そう。

4

木が話をするの。今度の寄港地で、有名な熱帯植物が船に乗って来て講演したんだよ。わたしは行かなかったけど、噂ではかなり眠くなる話だったみたい。始まるとすぐに寝ちゃったって、みんな言ってた。何の話だったのか、結局誰も覚えてなかったらしいんだ。わたしの推理では、眠っている間に全員の体に種が植え付けられたね。きっと。

だいたいあと半分。船から降りる前に全部撒かなくちゃ。

5

怖いよ。変な預言者みたいな人がいて、みんなに変なことを言うの。この船はもうすぐ巨大なクジラにぶつかって沈没するとか。そんなの困るよ。わたし泳げないんだってば。

今日は二千枚撒きました。何の数字かって聞くあの変なおじさん、毎日話しかけてくるんだ。うかうかしてると紙を取り上げられそうになるから大変。警備員の人と仲良くなってあのおじさんが近づかないようにしてもらおうつもり。

6

今度の寄港地ではバレリーナが乗って来たよ。一週間の間、毎晩バレエを見せてくれたんだ。わたしは勿論欠かさずに見た。すっごくよかったよ。それで手紙も少し間が空いちゃった。ゴメンね。だって、あのバレエを見たら手紙を書く気持ちになれなくて。

バレリーナは、踊り始める時は人間の姿をしてるんだけど、だんだん踊りが激しくなると頭に大きな目が生まれて額から長い管が伸びて、そして体がくるくるって回ると、彼女の身体の何倍もあるような大きな羽根が舞台に広がって、彼女が蝶になるの。舞台の上を何度も飛んで回ってた。あんなの見たことないよ。

蝶になったバレリーナは管になった口を客席に伸ばして、観客の額に口づけしてたよ。された人はうっとりして夢を見てるように幸せな顔になってたなあ。

バレエ漬けの一週間だったけど、ちゃんと一万枚くらい撒いたかな。もう少し。でも、全部撒き終わると寂しくなりそう。

7

あの、何の数字だっけつきまどってた変なおじさん、数学者だったんだって。いつもはデッキでジャグリングして見せてたのに、意外。

それで、おじいちゃんの手紙の数字を見て、これはなんかすっごい数列なんだって言ってる。世界を救う数列だ、だったかな。人類を救うだったかも。船の上では大騒ぎになってるよ。お

じいちゃん、それ本当なの？

8

今週になって、少し寒くなったなあって思ってたら、流水がすぐ側に流れて来たよ。でね、その氷の中に見たことのないくらい大きなクジラが閉じ込められてるの。あんまりクジラ見たことないけどさ。それがデッキからでも見えるんだ。それでね、氷の中のクジラの目が動いてるの。生きてるみたい。船のみんながクジラを助けなきゃって言うてる。あの裸の女の人を侍らせたおじいちゃんが船長に、金はいくらでも出すって言うてるのが聞こえた。船長には何か考えがあるみたい。

そんなこともあって、今日は数字を撒くのは中止。クジラのためだもん、いいよね。

9

船長は船を氷山にぶつけて氷を割るつもりなんだって。船、大丈夫かな。朝から乗員総出で、船の舳先に砕氷のための仕掛けを作ってた。料理用の包丁やフライパンまで駆り出されてたよ。今夜の食事はサラダだけかもー

今日も撒くのは中止。ゴメンね。

10

氷が割れてクジラは助け出されました。

クジラはそのまま泳いで行っちゃったけど、いつか恩返ししてくれるかな。ふふ。

そういえば、クジラに衝突して難破するって予言してた人いたけど、みごとにはずれたね。もう、人騒がせなんだから。

クジラの泳いでいった海に二千枚撒きました。あと少しです。

あ、あの数学者は偽物だったんだって。クジラ騒ぎのあと、おじいちゃんの数字のこと話す人いなくなっちゃった。人類を救う数列説も嘘だったのかな。教えて、おじいちゃん。

11

今夜は、あのお金持ちのおじいちゃんにご馳走になっちゃった。私だけじゃなくて、船に乗ってる人全員が招待されたんだ。

船長がクジラを助けている間に、クジラの体からおいしそうなところを切り取っていたらしいの。クジラを助けるように船長に言ったのも、それが目的だったんじゃないかって噂してる人もいたよ。でも、独り占めするんじゃないくて、みんなにご馳走してくれたんだから、悪い人じゃないと思うな。

今夜のコックさんはお金持ちのおじいちゃんの専属コックさんでした。でもね。お皿の上に載ってたのは、ネジが三つと歯車ひとつだけなの。どうしてあれがクジラのお料理なのかちっともわかんない。

それでも、男の人たちはおじいちゃんのお世話をしてる女の人の裸に夢中だし、女の人たちはおじいちゃんのテーブルの上に並べてある宝石しか見てないから、お皿の上に何が載っててもおなじだったと思うわ。

おじいちゃんの数字は一枚だけ残して、全部流しました。最後の一枚を流したら、おじいちゃんにもう会えないような気がして、手を離せなかったんだ。でも、船から降りるまでにはちゃんと流すから安心してね。

12

明日、船は目的地に着きます。  
夜はお別れパーティーでした。

深海魚のオペラ、はじめてきいたよ。なんて言うんだったかな、そうそう、発砲唱法っていうらしい。あんなのもあるんだね。歌のせいかな、聞いていた人たちの肩や頭のとつべんから、枝が伸びはじめて、終わる頃には船のホールは熱帯のジャングルみたいになってた。おかしいよね。

おじいちゃんの数字、今日、最後の一枚を海に流しました。本当にこれでよかったの？  
わたしはあの数字、全部好きだった。人類を救うとかそんなことはどうでもいいの。わたしにとって、この数字は、おじいち